〔Ⅲ〕生涯体育を目指した学校体育

――生徒による教材選択を導入した授業の試み（第二報）――

北田　明子　　天野菊三郎　　原田　秀雄

はじめに

本校では、昭和52年度から、高等学校三年生を対象にして、生徒達が選択した教材を生かして授業を展開するという試みを行なっている。その動機や目的については、先に第一報（本校紀要23集、p.119～125，1978）で報告したが、この試みが、生徒達の意欲的な体育授業への取り組みという点で有効な方法であると同時に、学校体育の生涯体育へのつながりという観点からも期待できると思われるので、引き続き実施してきている。しかし、一年実施するごとに、多くの反省点、問題点が浮び上るので、翌年度は、それらに何らかの対処する必要があり、毎年違った要素を含みながら継続してきている。また、この方法に対して、生徒の側・教師の側両方に、ある種の“慣れ”が生してきているのも見逃かせず、ここで、今後の方向の検討も含めて、3ケ年間のまとめをしておきたい。

1. 授業の展開

1年4期、各期16～20時間の編成て、1人4教材を学習するという枠は変更しなかった。改正点は、

53年度　Ⅰ　男女共通で選択できる教材をふやして、選択の幅をひろげた。この結果、52年度は男子8種目8展開、女子7種目8展開だったものが、53年度は、男子10種目10展開、女子9種目11展開となった。

Ⅱ　第2期が学期にまたがるのを避けた。

Ⅲ　評価は、1学期に1・2期、2学期に3・4期のようにまとめて行ない、学年の評定は、1・2学期分と、1月以降の参加状況から行なった。

54年度　Ⅰ　ほとんどの種目を男女共通に選択できることにした。この結果、54年度は、男子9種目14展開、女子8種目14展開となった。

Ⅱ　選択されたクラス内には、男女両方の生徒が混ることになったが、原則として男女別授業という基本線に沿って、授業内容や取り扱いの点で考慮した。

（表1）授業の展開

年度＼期	1	2	3	4
52	男男女女 ソ柔ソバ フ　フレ ト道トー	男男女女 ハ水卓水 レ ー泳球泳	男男女女 ハ卓ババ ン　ス ド球ドケ	男男女女 バサハハ スソン ケカドド ー
53	男男男女 女女 ソ陸軟ハ フ　式レ ト上庭ー 球	男男女女 女 バ水ソ卓 レ　フ ー泳ト球	男男男女 女女 ハ卓バハ ン　ス ド球ドケ	男男女女 サバハバ ソスンド カケド ー
54	男男男女 女女 ソ軟バハ フ式レレ ト庭ーー 球	男男男男 女女女女 軟卓ハ水 式 庭球ド泳 球	男男男男 女女女女 ハ卓バハ レ　ン ー球ドド	男男女男 女 サババハ ノススン カケケド ー
55	男男男男 女女女 ソ軟ババ フ式ス ト庭ケド 球	男男男男 女女女女 水バ卓少 レ　林 泳ー球寺 学 法	男男男男 女女女女 バ軟ハ卓 レ式 ー庭ド球 球	男男男男 女女女 バハバサ スン　ノ ケドドカ ー

2. 出席・参加の状況

表2て欠課の状況をみると、全体的に、男子は女子より欠課することが少ない。欠課からは、男子の参加意欲の方が高いと言える。

また、欠課は時期によって大きな差があることがわかる。特に第4期、1月以降だけをとり上げてみると、約10%が欠課しており、この時期の授業の取り扱いが問題てあることがわかる。しかし一方、体育だけは休まないという生徒もあり、必ずしも意欲の低下とは言ええず、目前に迫った共通一次試験などの大学入試との関りが大きいと思われる。

表3は、54年度の高1～高3の学期別欠課の比較である。他の学年との比較でみると、高2が最も参加率が高く、高3は最も低い。高3の授業内容にトレーニング的要素や強制的要素が少ないことや、展開されている種目の好嫌いや、授業そのものが天候に左右されるという実技の性質などから、「遊べる時間」という

（表２）　年度・期別欠課状況

数字は欠課率（%）

年度＼期	1			2			3			4								
52	4～6月			6～9月			9～11月			11～1月								
	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全						
	1.8	2.2	2.0	1.8	3.7	2.8	1.3	3.7	2.5	6.6	10.3	8.3						
53	4～5月			6～7月			9～10月			11～1月			11～12月			1月		
	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全
	1.1	2.8	2.0	0.9	3.6	2.3	2.0	3.3	2.7	5.4	9.3	7.1	4.2	6.6	5.4	6.7	12.3	9.5
54	4～5月			6～7月			9～10月			11～1月			11～12月			1月		
	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全	男	女	全
	1.2	2.0	1.6	1.8	2.0	1.9	1.4	2.4	1.9	7.0	6.4	6.7	2.1	5.0	3.4	11.4	7.7	9.7

（表３）　54年度欠課状況

（数字は%）

学年＼	1学期			2学期			3学期		
	男	女	全	男	女	全	男	女	全
高1	1.6	1.2	1.4	2.2	2.8	2.5	2.4	4.9	3.6
高2	1.3	1.0	1.2	1.0	2.7	1.9	1.2	4.5	2.9
高3	1.5	2.0	1.7	1.7	3.7	2.7	11.4	7.7	9.7

認識をもちやすく、もう一つ緊張感のない授業になりがちである。くり返し主旨を徹底することで、授業を生徒の主体的活動にしていく必要がある。

しかし、高３の出席状況全体をみる時、年々参加率は高くなっている。52年度以前の高３との比較は、第一報でも行なった通りであるが、展開授業を始めてからも、54年度の欠課は全体に低く、授業参加に関してははじめの目的を達成していると判断できる。

3. 授業に対する満足感

授業を通しての満足感は、目標の達成度や人間関係や、設備・用具などの外的条件によって影響を受ける。従って、技術の修得の程度や、その種目が興味のもてる教材であるかどうかという問題と重なってくる。

表４では、楽しかったという感想が年々増えているが、その原因の多くは、選択できる教材の種類をふやし、無理やりやらされているという感じがより薄くなってきているという点にある。このことは、表５と対応してみると浮び上ってくる。選択する時に、自分がやりたい種目だったかどうかは、授業に対する構えの基盤となることで、主体的に選んだことによって、満足感がより高められると思われる。「なぜ楽しかったか」に対する答えで最も多かったのは、その種目が好きだったから、次いで、グループの仲間と気が合ったから、はじめて取り組むスポーツだから、となっている。

54年度女子の場合は、選択の時に90%が満足できるような展開であって（表５）、かなり理想的な状態であると言えるが、これがそのまま満足感や意欲につながっているわけではない。その関連性はむしろ、マイナスの面でかなりはっきりしている。４期だけについてみると、他の期に比べて男女とも、やりたい種目でなかったとする者が多いが、これに対応して授業の満足感も少なくなっている。第４期については、今後さらに検討し、改正していく必要があろう。

いずれにしても、満足感は全体としてはかなり高いものとして評価できるが、逆に、だいたい10%以内とはいえ、欲求不満の生徒をどう考えていくかが問題として残っている。

（表４）　授業に対する満足感

○楽しかった、おもしろかった

×つまらなかった、いやだった　　（数字は%）

年度＼期		男					女				
		1	2	3	4	全	1	2	3	4	全
52	○	75	67	79	59	70	74	72	57	83	71
	×	7	7	7	7	7	5	9	13	8	9
53	○	83	76	83	78	80	83	81	67	79	78
	×	5	5	8	5	6	3	4	9	10	7
54	○	88	85	83	75	83	87	84	85	76	83
	×	5	6	9	9	7	2	5	2	11	5

※○×以外は「どちらとも言えない」と解答したもの

（表５）　選択する時の教材に対する興味

○やりたい種目だった

×やりたい種目がなかった　　（数字は%）

年度＼期		男					女				
		1	2	3	4	全	1	2	3	4	全
52	○	79	74	87	69	77	92	77	81	91	81
	×	21	26▲	13	31▲	23	8	23▲	19▲	9	19
53	○	97	83	86	73	85	89	90	81	86	86
	×	3	17▲	14	27▲	15	11	10	19▲	14	14
54	○	89	91	91	83	88	95	96	93	75	90
	×	11	9	9	17▲	12	5	4	7	25▲	10

▲印は×の割合が多いもの

4. 技術の修得

技術の修得に関しては、あまり高い自己評価はなされていない。教師の眼からみて明らかに進歩・上達しているような場合でも、自分自身ではあまりうまくなったと感じていない事が多い。ただし、初心者の場合は別で、ゼロからの出発については、ほとんど全員が、うまくなったと自己評価している。しかし、中学・高校の授業で今まで学習してきたようなスポーツ（たとえばバレーボールなど）では、部活動経験者などの技術水準には及ばないため、上達したと自分で認めがたい。また、部活動の選手だった者も、高2現役の水準までもどることができないために、この授業で技術の進歩があったとは認められない感じている。

学校での体育が、卒業後のスポーツ活動、さらには生涯体育と結びついていくためには、ある程度のスポーツ技術を身につけ、自分なりの自信をもっている方が好都合であるという観点からみれば、技術修得に関するこの結果はあまりよくない。しかし、軟式テニス、卓球、バドミントン等の初心者の受け止め方、部経験のある、かなり高い技術をもっている者の受け止め方、そして、その他の一般の生徒の受け止め方は、それぞれ別の要素を含んでいるため同一視できないのは当然であろう。チームゲームにおける総合的な力の向上は測りにくく、その意味で、技術の修得・向上も自覚されにくい面があるが、今までより面白いゲームができたという生徒の実感は、やはり彼らに技術的な向上があったとみなしてよいだろう。

（表6） 技術の進歩の自己評価

（数字は%）

年度＼程度	男			女		
	とても進歩した	少し進歩した	変化なし	とても進歩した	少し進歩した	変化なし
52	10	52	38	13	58	29
53	16	55	29	14	60	26
54	17	40	43	16	49	35

5. 意欲の自己評価

意欲の高さは、教材を選択する時の妥当性、興味との一致、また、授業を終えての満足感と密接につながりがある。表5は、選択の時の興味との一致度であるか、54年度4期の女子の、不満足者25%という数字はそのまま意欲の低さと重なっていることが表7に示されている。52年度男子の4期の場合も同様である。この傾向は、やりたくて選んだのに楽しくなかったという幻滅型や、やりたいとは思わなかったが、やってみると楽しかったという消極型の傾向よりはっきりしている。

生徒の授業への意欲的なとり組みは、毎年向上しているとは言えない。むしろ、選択授業の3年目で、すでに下降している傾向がある。方法の目新しさが消えると共に、"遊べる時間"としての体育のイメージが戻りつつあるのではないか。受身的にこの授業に接するとき、課題にとり組み、困難に打ち勝って克服するといった要素が薄れているのは事実で、スポーツの中に自分自身でそれらをみつけて努力していくという観点が不足しているわけである。

（表7） 意欲的取り組みへの自己評価

○とても意欲的、かなり意欲的である

△どちらとも言えない

×あまり意欲的でない、全く消極的 （数字は%）

年度		男					女				
		1	2	3	4	全	1	2	3	4	全
52	○	86	77△	82	69△	79	83	79	64	78	76
	△	10	18	15	26	17	13	15	25	19	18
	×	4	5	3	5	4	4	6	11△	3	6
53	○	88	78	87	83	84	83	83	69△	86	80
	△	5	17	3	7	8	10	14	23	10	14
	×	7	5	10△	10△	8	7	3	8	4	6
54	○	77	81	77	75	78	82	82	73	62	75
	△	20	15	16	14	16	11	11	23	22	16
	×	3	4	7	11△	6	7	7	4	10△	9

△意欲の低いもの

6. 展開授業についての感想

（表8） 展開授業についての感想

（数字は%）

年度	男		女	
	だいたいよい	問題が多い	だいたいよい	問題が多い
52	59	41	79	21
53	75	25	83	17
54	86	14	84	16

この方法については、表8のとおり、毎年肯定的意見が多くなってきている。展開する種目の幅を広げてなるべく多くの中から選べるようにしてきた事が、不満解消の一因である。しかし、「問題あり」の内容には検討すべき事か多い。要望のうち多いものは、「学校の授業でしかできないものを」とか、「球技ばかりでは……」というものである。

制約された枠の中に多数の意向をまとめていく過程で、切り捨てられるものが多い。この授業は、ある意味ではゲームの楽しさに片寄り、困難に向っていって成功するとか、リズム的に表現するといった、体育のもう一方の側の楽しさを切り捨てている結果になっている。陸上・器械運動、球技、ダンス等の厳しさを加えて、しかも、生涯体育とのつながりを考えた教材の選び方は困難で、この方式の全体的見直しにかかわってくる問題である。

7. ま と め

多少の手直しを加えながら行なってきた生徒による教材選択方式は、いろいろの問題点を含みながらも、定着しつつある。生徒の授業に対する反応をもとに、いくつかの面から検討してきたが、はじめに意図した通り、かなり意欲的な授業への参加があり、未経験のスポーツにもとり組んで、それなりの成果をあげていると評価できよう。第一報で課題とした点について、ここで再度検討し、今後の問題点を明らかにしておきたい。

① とりあげる教材と展開の組み方

授業でとりあげる教材については毎年該当の学年にアンケートして決めてきたが、興味がなかなかまとまらない場合は、直接希望を出しあって案を修正して決めることになった。生徒達の興味関心は厳密に言えば個々別々であるので、誰でもある程度は我慢してやる部分がある。過去3年間の結果を参考にカリキュラムを組んでおいた場合、どの程度生徒に不満が残るか、アンケートで決めていくことが絶対不可欠の手続きなのかどうか、検討の余地があろう。教材の種類は、10種目ぐらいが限度であり、また、十分に生徒の希望を満しうると思われる。

② 時期及び4期制

第一回の反省から、以後は、学期ごとに2期ずつあてはめるように組んできた。このことで、夏休みにまたがる教材はなくなり、評価も行ないやすくなったが、反面、1月になってからの授業の取り扱いが問題となってきている。高3の1月以降は12月までの時期とは学校全体の態勢も異なっているので、3学期とはとらえにくい。

「つけ足し」の時間にならないよう、もう一度検討する必要がある。

③ 経験者と初心者

テニス・卓球・バドミントンなどの教材は、初心者と部経験者の二通りにわかれる。このことについて、生徒がどうとらえているか知る必要がある。54年度にアンケート調査を行なったところ、懸念されていたような結果はみられなかった。すなわち、初心者は「教えてもらえるから（部経験者と）一緒でもよい」という答えが多く、部経験者の方は「何とも思わない」「教えたりする時があって、その逆もあるので、いいと思う」というものが多数であった。チームゲームについても、生徒の希望でリーグ制にして分けた場合と、混成チームにした場合があったが、特に問題はなかった。ただし、経験者チームと一般チームとが対戦することについては、不満の声がきかれた。いずれにしても、授業の展開の中で配慮する必要はあるが、選択時に資格として限定する必要はないと思われる。

④ 評価

評価については初回からほとんど変更していない。すなわち、出席点が50%、技術点30%、態度点20%とし、各期ごとに10段階で評価する。学期末は各期の合計点から10段階に換算して行なう。この評価方法では、1・2年生時に評価の低かった者はやや上昇する。逆に、中間層では「やっても別に評価も上らないし……」という声もきかれた。評価の方法については依然として問題が多い。

最後に、この方式が定着しつつある一方、すでにマンネリ化が始まっているように見られる点もある。「高三になったら授業でテニスができる」という期待と同時に「高三になったら走らされない」とか「服装も大目にみられる」といった発言になっている。今のところ、教師も生徒も楽しみな授業ではあるが、この意義については、年度はじめのオリエンテーションだけでなく、機会をとらえて理解させるようにして、充実した授業となるように今後とも努力していきたい。